

## 前書き

この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは一切関係ありません。一部残酷な表現が含まれています。コミカルな喜劇をお望みの方は閲覧をお控えください。また、この物語は五年前に書いたものを女性視点で書きなおしたもので、万が一、シナリオ運びにどこかで見覚えのある方がいた場合は、そっと知らないふりをしてやってください。

夢は夢ではない。夢は、虚無であり、虚構である。けれど夢は、夢を見ている者にとって、現実である。今この瞬間が覚醒状態で、実際に夢でないと断言することできない。なぜなら夢は、目が覚めるその瞬間まで現実だからだ。目が覚めてはじめて、それが虚無で虚構でただの創られただけのものであると知覚する。そして夢は、虚無で虚構だから、時間が立てば自然と失われていくものである。ありもしないものを望んで嘆き、ありもしないものに縋って側む。夢でよかったと安堵する日もあれば、何故夢でなかったのかと無念がる日もある。この世は美しくも醜く、慈悲深くも残酷で、儚いからこそ尊い。人の生に限りがあるからこそ貪欲に、虚無を、虚構を、現実にするために、強い意志をもって誰もが生きている。けれど、人の心は酷く脆い。現実が耐え難いと、人は逃避する。それは叶いもしない夢、それは失われてしまった夢、それは得ることのできなかった夢。夢を見ることは人に許された最上にして最低の行為である。夢を語る者は眩しく、夢に燃える者は強い。同時に、夢を奪われた者は寂しく、夢を諦めた者は弱い。夢は、あるだけで貴い。

夢は夢ではない。夢が夢と呼ばれる所以は、それが虚だからだ。存在してしまった瞬間、それは夢ではなく現実となる。夢を現実に変えることが、全ての人が望む最高のシナリオだ。だが、幸福と不幸の量が一定だと信じる者にとって、過ぎた幸福はもはや不幸だ。いいことがあった日ほど恐ろしい夢を見て、辛く悲しかった日ほど愉快的夢を見る。誰かよりも幸福な日は誰かが不幸であり、誰かよりも不幸な日は誰かが幸福である。他人の不幸は蜜の味。真の幸福など存在するはずもなく、人はいつも不幸だ。虚無を、虚構を抱き、夢が叶ない日々を過ごす。叶ってしまった夢はもはや夢ではなく現実であり、現実味を帯びてきた夢は夢ではなくなるからだ。理想に近付けようと追い求めれば追い求めるほど、人は無意識にそのハードルを上げる。かつて望んだものが全て実現していても、いま望むものが充足する日は決して来ない。現実には逃げ場はない、だから人は夢を見る。けれど夢は夢でしかなく、誰もが渇き、喘ぐ。無自覚に不幸を、現実を求め、打ち砕かれるために人は夢を見る。

人は夢を見る。息が絶える、その瞬間まで。



# 約束





暗い箱の中で今日も女は目を覚ます。彼女が真っ先に行うのは、体を起こすことでも照明を付けることでもなく、コンピュータの電源を入れることであつた。ディスプレイに灯された小さな箱の中は酷く乱雑で、文字や絵の描かれた紙で覆い尽くされた床に足の踏み場はない。だがそんなことは彼女にとってどうでもよいことだつた。彼女にとって世界は目の前の機械の箱で完結していたからだ。

コンコンと箱をノックする音が聞こえた。彼女は応えない。

「こんにちは。今日もいい天気ですね。」

窓もない小さな箱の中で、その声の真偽を図ることはできない。彼女は意にも介さず黙々とキーボードを叩いた。声は続いた。

「えっと、今日は君の大好きなリンゴをもらってきましたよ。一緒に食べましょうね。

僕、ちゃんとうさぎさん切り、ぶきつちよながら練習してきました。」

彼女は答えない。彼女は応えない。声の主はそれでも言葉を続けた。

「外はもうすっかり冬になってしまいました。でも君のところはいつも温かいね。これじゃ今朝雪が降っていたって言つても信じてもらえそうにないなあ……。」

コンッ、と果物を切る音がした。声はいつまでも続いた。彼女は決して応えない。ディスプレイに表示される記号を、画像を、スピーカーから出力される音を、ただただ拾つた。雑音のように混じる声の問いかけに彼女が答えることはないのに、それは楽しそうに声の主は言葉を綴り続けた。

そんな声が途切れたのはいつだつただろう。突然箱が揺れた。彼女はもう驚きもしない。これも慣れたことだつた。

「また来ますね。」

この日一番の明るい声でそう言つた後、箱の外からもう何も聞こえてくることはなかった。彼女は電子画面を見つめる。一定のリズムで刻まれる電子音を聞きながら、今日もひたすらに文字を打ち続ける。しばらくして、すっかり静かになつた箱の中で彼女は目を閉じた。

今日も彼女は夢を見る。それは辛く苦しいばかりの、甘く優しいばかりの夢。繰り返し、何度も何度も、彼女は夢を見る。目が覚めればそれは夢、たちまち霧散して何も残らない。彼女はまた計算機と向き合う。そしてまた、彼女は夢を見る。彼女にとっては、それだけが世界の全てだつた。

【ビオラ・スリズイエは幸せの絶頂にあつた。優しい両親と優しい夫、それでも十分なのに天から新たな幸福を授けられた。】

白い小さな箱の中で、今日も彼女は目を覚ました。パソコンの電源を付けると、彼女は明るくなった箱の中で足元に広がった大量の印刷物をおもむろに整理し出した。スクールのこと、美容院のこと、喫茶店のこと、水族館のこと。無秩序で何の脈絡もないそれらを拾っては整え、何らかのグループ分けができないかと考えた。だがそれは徒労に終わった。新しいものから順に分別していたところ、突風に紙が攫われ、収集がつかなくなったからだ。分類していた紙の束が頭上を舞った。窓もないこの箱の中でいったいどこから風が来たというのか。疑問はすぐに解消された。

「ほら、いい風でしょう。今日は気温もそんなに低くなかったから仕事は比較的やりやすかったよ。これからまた冷えるなんて考えたくないですね。」

いつもの声が箱の外から聞こえた。彼女が応えることはないのに、今日も声は楽しそうだった。彼女の鼓膜を聞きなれた電子音が叩く。

「聞いてくださいよ。今日ね、宛先に『十六時までをお願いします。』って書いている配達物があつたんです。そんなの指定便じゃなきゃできないんですけどね。書いとけば何とかなると思うっているんですかね……まあ、偶然にも十五時頃に配達できちゃったんですけど。これで味を占めたらどうしましょう。」

風に舞った印刷物を横目に、彼女はいつも通りキーボードと戯れだした。風が髪を撫でる感覚に少しの違和感を抱きつつ、ディスプレイの出力結果を見つめた。声は止むことなく降り続けた。

【ビオラ・スリズイエは不幸のどん底にあった。愛する両親と愛する夫、それでも耐えがたいのに、天は彼女の最後の希望をも取り上げた。】

トントン、何かを叩く音がした。今日も彼女は応えない。

「あれれ……おかしいな……むむ。」

ゴンツ、ゴン、随分と不吉な音が箱の外から聞こえた。声の主は何と聞っているのか、彼女にはわからない。キーボードを滑る指は今日も止まることはない。彼女にとっての世界は目の前の自動計算器、ただそれだけだった。おびただしい量の印刷物の海の真ん中で電子画面とひたすらに向き合う、それだけが彼女の全てだった。彼女の預かり知らぬ外の世界で起きた錠の開く小気味良い音が、笑顔であると容易に想像できるような朗らかな声と共に鼓膜を震わせた。

「こっそり持ってきたから、ナイショですよ。」

言うや否や、ふわりと箱の中が温かくなった。その時はじめて、彼女は凍えていたこと

に気付いた。外から何をしたのかはさっぱりわからないが、彼女は随分久しぶりに表情筋を緩ませた。その後、バタバタと箱の外が騒がしかったが、気にすることもなく彼女はその温かさに浸っていた。この日はいつもより少しキーボードを撫でる手が軽快だった。スピーカーからは今日も一定のリズムで電子音が響く。

【全てはもう済んだことだった。瞬く間に全ては終わり、何事もなかったかのように世界は回り出した。ビオラの元々白かった肌はさらに白く、薄かった腹はさらに薄くなった。】

彼女が疑問を抱いたのはついさっきのことだった。視界いっぱい印刷物、理解できない言語を出力し続けるディスプレイ、途切れることなくリズムを刻む電子音を響かせるスピーカー、真っ暗なこの狭い箱の中はいったいどこなのだろうか。この小さな世界が彼女にとっての全てだった。だがそれはいつか、彼女には答えられなかった。その瞬間に、キーボードを撫でていた手が止まった。何を打っていたのか分からなくなつたからだ。手を止めてもパソコンは稼働し続け、意味をなしていない文字列を出力し続けていた。頭に届くのは今日も衰えることなくリズムを刻む電子音ばかり。誰もいない、何もない、この閉ざされた空間で、混乱で頭が割れてしまうのではないかとすら思ったとき、いつもの声が耳に届いた。

「おや、今日は早起きですね。」

箱の外に誰かがいるというその事実、どうして今まで疑問を抱かなかったのか。壁に縋りつくように耳を押し当てて、何か情報が得られないかと必死になった。壁は厚いように、音が箱の中で何度も反響した。今日は電子音がやけにうるさく聞こえる。

「早起きの上に元気ときた。気が付いたらどこかに行つてしまひそうですね。」

穏やかな声が箱の中に響き渡る。いつもこの声に応えなかったのは何故だったのか、もうわからない。いまはこの声だけが彼女にとって目に見える蜘蛛の糸だった。小さな箱の中が世界の全てだと思っていた。けれど、箱の外にも世界があることを彼女は知っていたはずだった。知ることと理解することは似ているようで全く違う。

「どこにも行かないでくださいね。」

じっとしてられるはずがなかった。彼女はその声に尋ねたいことが山のようにあった。いまならこの声のどんなことにだって応えられる。そう、彼女は心から思った。しかし、張り上げたはずの声は、どこにも届くことはなかった。彼女の喉は、震えなかった。

「まあ、どこに行つても僕が見つけ出してあげますけど。」

その言葉が箱の中に響くと同時に彼女は声も上げずに涙を流した。

【数日ぶりに、言葉を発しなくなった両親を連れて、病める時も健やかなる時も共にあろうと誓った者のいない我が家へ帰った。そこは酷く広く、酷く静かで、何もなかった。】

この日、彼女がパソコンの電源を入れたのは、ただ明かりを求めていることだった。この箱の中には、ディスプレイ以外に光を発するものはない。聞きなれた電子音が響く。膝を抱えて丸くなりながら、声を待った。彼女にはもはやそれしかなかった。キーボードを叩く気にはならなかった。けれど、待てども暮せども声が聞こえることはなかった。

【空っぽの家で空っぽになった人間にできることなど、何一つなかった。服を着替えなければ、食事を取らなければ、これからのことを考えなくては、いけなかったのに、何一つできはしなかった。小さく声を上げたかと思うと、そのまま意識を失った。】

もうどれほどの時間を過ごしただろう。目が覚めればすぐに聞こえたはずの音が、聞こえなくなった。耳がおかしくなったのかとも思ったが、狂うことなく刻まれている電子音がそれを否定した。相も変わらず喉からは空気が漏れなかった。薄暗い箱の中でただ一人、震える手足を抱いて彼女は眠りについた。

【真っ白な世界。何もない世界。】

目が覚めると同時に濡れた頬を拭った。何もする気が起きずに、この日はじめて彼女はコンピューターの電源を入れなかった。箱の中はほとんど冷えていき、いつも決まって聞こえる電子音もどこか遠く感じた。頭がふわふわとしてきて、このまま眠ってしまえば気持ちがいいだろうと、横になり、丸くなって目を閉じた。自分自身を緩く抱きしめながら彼女は意識を手放した。

【—— 出會つて—— 祝い—— お父さんとお母さんが—— 赤い—— あの人も——  
き込まれ—— お腹が、痛い——】

「いらー！」

大きな声に飛び起きた彼女の目に映ったのは、その声の主と思しき男の顔だった。

「こんなところで寝ているなんて……さすがに疲れたんですか。」

「え……なに……ここ……あれ、声……」

振動した喉に動揺を隠すことができず、思わず視線が泳いだ。心配そうな男の姿はグレイのフロックコート。自分自身以外の人の姿を見たのはいったいいつぶりだろうか。ぼんやりとした頭で、まるで結婚式の新郎のようだと言えば、男は呆れたような声を出した。

「随分豪快な寝ぼけ方ですね。どんな変わった夢を見ていたんです。」

首をかしげつつ見下ろせば、眼下に広がるのは淡いピンクの華やかなドレスと、青々とした緑の地面。あるはずの白い壁も床も電子機器たちもそこにはなかった。煩わしかった電子音もいまは聞こえない。彼女の困惑をよそに、男はその手を引いた。視線をあげれば、そこには見知った顔が大勢あった。学生時代の友人、かつての職場の同僚、親戚や隣人、そして両親。その全てが彼女に笑顔を向けていた。隣に聳え立つのは教会。色とりどりの衣装を身にまとった人々に囲まれて、彼女は方々からかけられる言葉に訳も分からぬまま相槌を打った。

「おめでとう。」

「主役がどこに行っていたんだ。早く一緒に食べよう。」

「慣れない靴で足を痛めてないかい。酷くなる前に言うんだよ。」

「ああ、本当に綺麗だよ。おめでとう。」

「喉が渴いていないかい。これがうまいよ。」

目が回るような情報の洪水。あの白い箱はいったいどこだったのか、何だったのか、そんなことがどうでもよくなってきた頃、寝起きで全く頭の回っていなかった彼女は、徐々に現状を把握しだした。今日は彼女の結婚式だった。地元の教会で近親と細々と式を挙げる予定が、夫の友人が秘密裏に人を集めていたらしく、教会を出るなり視界一杯の懐かしい面々が、祝福の言葉を投げかけてきたのだった。驚き以上に幸福が押し寄せて、せっかく整えた顔はぐちゃぐちゃになってしまった。予想通りとばかりに母と友人が彼女を控室に押し戻し、身に纏っていた純白のドレスを剥ぎ取られ、お金があれば着たいと思っていた、披露宴用のドレスを着つけられた。崩れ切った顔は薄化粧で仕上げなおされ、教会横の会場に戻ったときには立食パーティの準備が整えられていた。近隣住民も交じってのちよつとしたお祭り騒ぎになり、彼女は幸せの絶頂にあった。緊張の糸が緩んだ時にふと階段の側に腰かけたまま、少し意識を飛ばしていた。それが彼女に理解できた全てだった。



隣で微笑んでいる今日から夫になる男は、彼女の皿に盛られたデザートを掬っては口に運んだ。一人で食べられると言っても、男は笑顔で飲み物を渡してきた。グラスを持つ右手、皿を持つ左手、片手でグラスと皿の両方を持ってないわけではなかったが、今日くらいは男の好きにさせてやろうと諦めて運ばれてくる食材を受け入れた。男は終始楽しそうであつた。

「幸せだね。」

「ええ、幸せね。」

慈愛の表情に満ちた男の腕に抱かれ、彼女は心の底からそう答えた。甘美な時間に酔いしれた。彼女は酷く恐ろしい夢を見ていた。煌びやかな衣装を身に纏い、美味な食事を取り、多くの人から祝福を受け、誰よりも幸せだったこの時間があまりにも非現実的だったが故に、狭く寂しい世界で一人嘆くだけの苦痛を創つたのだろう。夢は、所詮夢である。

「幸せだね。」

男は微笑んだ。彼女も笑顔で応えた。

「これからもっと幸せになりましょう。」

男は微笑んだ。彼女の笑顔に答えた。

「二人でもっと幸せになりましょうね。」

男は微笑んだ。彼女は笑顔を消した。

彼女はその場に崩れ落ちるようにしやがみ込み、割れんばかりの絶叫をあげた。頭を掻き毟り、浅い呼吸で胸を強く押さえ、震える肩を抱いた。男だけが彼女に寄り添い、頬を濡らしながら彼女に嘆願した。

「言わないで。言わなければずっと一緒にいられます。どこにも行かないでください。側にいてください。僕は、あなたが幸せなら他に何もいらんいです。」

彼女はこの男に尋ねたいことが山のようにあつた。いまはこの声のどんなことにだって応えられる。そう、彼女は心から思った。

「どうして、私は、」

「言わないで。」

しかし、張り上げたはずの声は、男に届くことはなかった。彼女の言葉は、受け入れられなかった。

「全部悪い夢だったんです。夢は所詮夢でしかありません。辛いなら逃げていいんです。誰もあなたを責めたりしません。約束したでしょう。一緒に幸せになろうと。」

その言葉が男から発せられると同時に彼女は声を上げて涙を流した。

「あなたは……あなたが、私の創った、夢、よ……。」

都合のいい世界はたちまち霧散した。華やかな衣装も、豪勢な食事も、優しい人々も、全てが塵と化した。最後まで追い続けた男のいた場所を見つめながら、彼女は目を閉じた。

「……三人で、幸せに、なりたかったね。」

彼が目を覚ました時、全ては終わっていた。

愛しい妻の身に愛の結晶を授かった。判明したその日は近隣住民を巻き込んだちよつとしたお祭り騒ぎになったが、主役であるはずの夫婦はぐちゃぐちゃになるほど泣いていた。妻が身籠ったことを知った妻の両親が頻繁に家を訪れるようになり、まだ性別もわかっていないのに多くの衣服やおもちゃを買うため、一気に家の中は賑やかになった。彼は妻との未来のためにより一層仕事に精を出した。妻の体調は芳しくはなかったし、妻に代わって家事を行うことが増えた彼自身もまた、万全の体調というわけではなかった。それでも、彼は幸せだった。辛いことも苦しいことも、全てを乗り越えられるほどの幸福がそこにはあった。妻の腹が薄く膨らんできた頃には、その上に頭を置いて幸せを噛み締めた。愛しさで涙が溢れるたびに、しっかりと妻に叱責を受けた。どんな過酷な労働も、全てがこの幸福の前では霞んだ。

ある日、その幸福は無に帰した。いつも通り訪れることになっていた妻の両親を、いつも通り最寄り駅まで迎えに行ったときにそれは起きた。妻の両親と合流した旨を妻に連絡するべく通話をはじめたとき、交通量の多い目の前の交差点を横切っていく車と車の隙間から、本来赤信号であるはずの真正面から向かってくるものを視界に捕えた。減速することなく迫り来る鉄の塊は、やがて大きな音と共に車の列に突っ込んでいった。真横から突き飛ばされた車両が速度を殺すことなく彼と妻の両親のいる歩道目がけて迫って来ることに対応できるだけの時間は、もちろんあるはずもなかった。宙を舞った携帯電話は破損し、平和だった世界に叫び声が響き渡った。

彼女が目を覚ました時、全ては終わっていた。

彼女は愛しい男と結ばれ、裕福でないながらも満ち足りた生活をしていた。事が判明してから話ほとんどん拍子に進み、夢に見た純白のドレスを身に纏う日が訪れた。薄く膨らんだ腹のためデザインは選べなかったものの、そんなことは取るに足らないことであつた。元々の弱かつた彼女を氣遣つて、隣町に住む両親が頻繁に彼女の元を訪れるようになった。夫も献身的に彼女に尽くしてくれた。式のために集まつた多くの知人に囲まれて、彼女は泣きながら全てに感謝した。不幸にも途中で体調を崩したものの、誰一人嫌な顔せず

に彼女を労り、抱えきれないほどの祝福を贈ってくれた。

ビオラ・スリズィエは幸せの絶頂にあつた。優しい両親と優しい夫、それだけでも十分なのに天から新たな幸福を授けられた。

「幸せだね。」

「ええ、幸せね。」

「三人でずっと、もつと幸せになろうね。」

夫となつた男に向かつて、彼女は力強く頷いた。その幸福がいつか壊れる酷く脆いものだなんて思いもなかった。

あまり体調の芳しくない日の午後のことだつた。有り難いことにこの日は両親が訪れることが分かつていたため、彼女はほぼ一切の家事を行うことなく床に臥せていた。何か食べると夫が作ってくれた粥を腹に入れた以外、ろくに動きもしなかつた彼女の携帯電話が震えた。重い身体を持ち上げて応答した先から聞こえたのは愛しい夫の声。両親と無事合流した旨、今晚の食事の材料を持参してくれている旨、自宅に帰るまでの時間等、必要最低限の情報だけを適切に伝える夫のそれは、会話すら億劫だつた彼女にとって心地のいいものであつた。氣を付けて帰ってくるような言葉を綴ろうとしたとき、突然けたたましい異音を放つてその通話は途切れた。その後、何度かけなおしても夫も両親も応えることはなかつた。氣が動転してしまいそうになつた彼女の耳に届いた自宅の固定電話のベルは、受け入れ難い事柄を彼女に伝えた。両親と夫が信号無視の乗用車事故に巻き込まれて意識不明のまま病院に搬送されたということが薄っすらと認識できた以外、細かな話は何も頭に入つてこなかつた。ズン、と体の中で重い何かが落ちていく感覚がして、それは突くような痛みに変わつた。耐えきれずに意識を失つた彼女もまた、救急搬送された。

次に目が覚めた時、そこは真つ暗な知らない部屋であつた。曖昧な意識の中、扉の外と思われる場所から複数の女の声が聞こえた。そこから彼女が理解できたのは、彼女自身の身に起きた不幸と、事故に巻き込まれた男と両親の訃報だつた。どうやら看護師同士の雑談だつたようで、上役と思われる別の女の注意を受けると同時にその複数の声は散つた。彼女が目覚めたことに誰も気づくことなく、静寂が訪れた。まるで他人事のようにそつと腹を撫で、彼女はベッドに沈んだ身体を起こすことなく、ぼんやりと天井を見つめた。

ビオラ・スリズィエは不幸のどん底にあつた。愛する両親と愛する夫、それだけでも耐えがたいのに、天は彼女の最後の希望をも取り上げた。

「ごめんなさい。」

漏れた言葉は誰に向けたものだったのか、それは彼女自身にもわからなかった。体の節々が訴える痛みが彼女に現実を突きつけ、擦り切れた心は限界を迎えた。悪夢だった。涙は出なかった。彼女はそのまま意識を手放した。そしてもう、目を開くことはなかった。

虚像世界で全てを思い出した彼女はまた、真っ暗な小さな箱の中にいた。彼女はもう気づいていた。この箱は自分自身で作った壁であり、現実を直視できない弱さだった。悍ましい想いに蓋をして、何も考えずに呼吸だけをする肉塊として、生きることも死ぬことも放棄した。緩やかに滅んでいく道を選んだはずが、反応がないはずの彼女に尽くす声に希望を見出し、足掻いたのは、きつと心のどこかでまだ生きたいと願っていたからだろう。再び生きることを選択するために心にかけて鍵を取り除き、心を抉り、手に入れたのは直視がたい現実。あのまま夢の中でまどろんでいた方がどんなに楽だったか、考えるだけで眩暈がした。けれど、どこまでも優しい夢の手を振り解いたのもまた彼女の意志だった。例えあのまま浸っていたとしても、いつかは違和感を抱き崩れ去る程度の虚構。いずれ夢が終わり、彼女に完全な終わりが訪れても何も残りはない虚無。多くを望んだわけではなかったはずだった。けれどそれは驕りだった。過ぎた幸福に身を任せ、些細な不幸に惑わされていた。ただ側にいてくれるだけで十分だと囁いてくれた男はもういない。生まれてきてくれてありがとうと泣いて喜んでくれた両親ももういない。数多くの人に祝福されて生まれてくるはずだった命も、もうここには存在しない。けれど、そのどれも彼女がこうして消えていくことを決して望みはしない。彼女は生きねばならなかった。逃避は十分にした。

「夢だと気づいたその時から、もうそれは夢ではなく現実。」

真っ白な世界。何もない世界。開いた眼に映るのは潔癖すぎる白の天井。生体情報モニタが少しうるさいだけの部屋。濡れた頬を拭うのは、自分自身以外の人の手。

「随分長いお昼寝でしたね。」

声に、香りに、感触に、視線を移した先にあったものは、夢。

「おかえり、ビオラ。」

彼女の答えはひとつだった。

「ただいま、サクヤ。」

夢は夢ではない。夢は、虚無であり、虚構である。けれど夢は、夢を見ている者にとって、現実である。今この瞬間が覚醒状態で、実際に夢でないと断言することできない。なぜなら夢は、目が覚めるその瞬間まで現実だからだ。目が覚めてはじめて、それが虚無で虚構でただの創られただけのものであると知覚する。そして夢は、虚無で虚構だから、時間が立てば自然と失われていくものである。ありもしないものを望んで嘆き、ありもしないものに縋って側む。夢でよかったと安堵する日もあれば、何故夢でなかったのかと無念がる日もある。この世は美しくも醜く、慈悲深くも残酷で、儚いからこそ尊い。人の生に限りがあるからこそ貪欲に、虚無を、虚構を、現実にするために、強い意志をもって誰かが生きている。けれど、人の心は脆く脆い。現実が耐え難いと、人は逃避する。それは叶いもしない夢、それは失われてしまった夢、それは得ることのできなかった夢。夢を見ることは人に許された最上にして最低の行為である。夢を語る者は眩しく、夢に燃える者は強い。同時に、夢を奪われた者は寂しく、夢を諦めた者は弱い。

けれど、夢を見ることは罪ではない。夢は、あるだけで貴いのだ。





彼が目を覚ました時、はじめに飛び込んできたのは妻の両親の顔だった。目を真っ赤に張らせた妻の両親は彼に事の経緯を話した。猛スピードで信号無視をした車に突き飛ばされ歩道に向かってきた乗用車を見止めた彼の咄嗟の判断で、両親は車の進行方向と逆に突き飛ばされたらしい。義父は突き飛ばされた先の壁で少し強く背中を打ったため軽い脳震盪を起こし、義母は潰れた車と血まみれの彼を見て貧血で意識を失ったらしい。警察の話によると、事故の原因は長時間労働による居眠り運転で、巻き込まれた乗用車に乗っていた家族は不幸なことに全員亡くなったそうだ。ファミリーカーに起きた突然の悲劇として、テレビや新聞に小さく報道されたいらしい。幸か不幸か、巻き込まれた車が交差点の角にある電灯に当たったため速度が少し殺され、彼の被害が少なくて済んだようだった。割れたガラスで額を少し切ったため大げさに流血し、直撃した右腕が反対方向に曲がっていたため、それは重体に見えたそうだ。実際には右腕もきれいに折れていたため、全治三か月程度で済み、手足の傷口を数針縫った程度であった。両親の言葉通り、彼の右腕はしっかりと固定されており、あちこちの傷が少し引き攣るような感覚はあるものの、生命の危機を感じるほどのものではなかった。両親に至っては擦り傷を負っただけで、一応念のためMRI検査等も行ったが何の問題もなかったという。無事を喜び、ふと思いついた疑問を両親に投げかけた。二人は顔を見合わせて渋い顔で言葉を綴った。

まだ安静にしているよう医師に告げられた言葉を振りきってやってきた病室は酷く静かだった。真っ赤な夕陽に照らされた本来真っ白なシーツに横たわるのは、青い顔をした妻だった。点滴と呼吸補助の機器がある以外は、ただ眠っているだけのように見える彼女のシーツを動く左腕を使ってそっと捲り、受け入れ難い事実を目の当たりにした。冷たい妻の手に縋りついて、彼は少し泣いた。精神的な疲れからか、彼はそのまま意識を失った。

次に目が覚めたのは元いた病室だった。右腕の骨折以外大きな怪我もなかったため、いくつかの検査を受けた後に退院手続きを行った。その後、警察と名乗った男にいくつかの質問をされたが、彼の頭にも入り入っては来なかった。諸々の拘束から解放された彼が最初に向かったのは妻の病室だった。彼は努めて、明るい声で妻に話しかけた。

「おはよう、ビオラ。退院手続きが済んだから、これからはいつでもここに来られるよ。」

真昼だというのに、彼女は穏やかに眠っていた。彼女のベッドの横の椅子に腰かけ、彼は彼女の冷たい手を握って話しかけた。

「仕事はどうしようか。この腕だとはばらくは休まなきゃいけないけど……ああ、金銭のことは心配しなくていいよ。君には内緒でこんな時のために少しだけと貯金をしていたんだ。保険もしっかり入っていて本当によかったね。」

彼女が応えることはない。それでも彼は話しかけた。

「僕も疲れちゃったし、少しだけお昼寝しようかな。夕方には起こしてくださいね。」

彼女は答えない。彼は、彼女の手を握ったまま宣言通り午睡をはじめた。

彼女の両親が彼を呼び戻しに来るまで、彼女が目を覚ますことはなかった。

事故にあい彼が意識を失っていた二日間、彼女が意識を取り戻すことは一度もなかった。過度なストレスによる後期流産、母子ともに危険な状態であった。幸い、母体の命に別状がなかったものの、精神的な苦痛からか彼女は昏睡状態に陥った。呼吸や脈拍に異常はなく、ただ眠っているだけのように見えた。数日ぶりに、言葉を発しなくなった両親を連れて、病める時も健やかなる時も共にあらうと誓った者のいない我が家へ帰った。そこは酷く広く、酷く静かで、何もなかった。空っぽの家で空っぽになった人間にできることなど、何一つなかった。服を着替えなければ、食事を取らなければ、これからのことを考えなくては、いけなかったのに、何一つできはしなかった。小さく声を上げたかと思うと、そのまま意識を失った。全てはもう済んだことだった。瞬く間に全ては終わり、何事もなかったかのように世界は回り出した。ビオラの元々白かった肌はさらに白く、薄かった腹はさらに薄くなった。彼の腕が完治しても、彼女が目を覚ます日は来なかった。

どんなに天候が悪い日も、どんなに仕事辛い日も、彼は欠かさず彼女に会いに行った。そして決して反応がないことを知りつつも彼は毎日彼女に話しかけ続けた。たとえ意識がなくても、声は届いていると信じていたからだ。病室を去るときは必ず彼女を優しく抱きしめてから帰った。触覚や温感はその失われないことを知っていたからだ。

天気の話をした。仕事の話をした。食事の話をした。体調の話をした。お金の話もした。両親の話、友人の話、同僚の話、隣人の話を、近所の子供の話をした。いままでの思い出の話をした。いろんな話を、毎日毎日彼女に続けた。誕生日にはケーキを買って、プレゼントにあたにかいブランケットを贈った。一人でろうそくをつけ、一人で歌を歌い、一人でケーキを食べた。彼女は静かに眠っていた。心音も脈拍も踊ることはなかった。

「こっそり持ってきたから、ナイショですよ。」

そう言って彼女にブランケットをかけ、誕生日を祝う言葉を添えた。彼女が応えることはない、この日もそのはずだった。

「え……。」

彼女が、微笑んだ。目を開いたわけではない、言葉を発したわけではない、彼女が目を覚ましたわけではない。それでも、彼にとっては十分だった。

「僕は、君を待つよ、ずっと、ずっと、いつまでも。」

ただの反射だと周りは一蹴したが、彼にとってはどうでもいいことだった。彼女が生きていてくれるだけで、彼にとっては十分だったからだ。

季節は秋から冬に移り変わった。事故に関する諸々のことも終わり、折れ方がよかったのか大きな支障も出なかった右腕がリハビリを終え、以前よりは反応が鈍い気もするがほとんどが元通りの生活に戻った。違うことは家に帰っても妻がいないことと、その妻に会うために病院に通っていることだけだった。どこにいても憐みの視線を受けたが、彼はそれほど不幸ではなかった。幸運なことに彼は自分自身も妻の両親も事故で失うことがなく、幸運なことに大きな怪我を負うたり、重大な障害が残ったわけでもない。幸運なことに、妻も眠っているだけで死んでしまったわけではない。失われたものは小さくはなかったが、全てを失ったわけではない。全ては考え次第だ。辛いこと苦しいことばかりに目を向けていても何も愉快ではない。せつかくしぶとくも生き残ったのだから、毎日を精一杯生きようと心から彼は思っていた。そんな彼にある日届いた知らせは、妻の異変を知らせるものだった。彼は職場を飛び出して病院に向かった。

「おや、今日は早起きですね。」

脈拍や心音に異常が見られた妻のベッドは、かかりつけの医師と看護師に囲まれていた。彼は彼女の側になるべく落ち着いて近づき、まるでいつも通りとばかりに声をかけた。

「早起きの上に元気ときた。気が付いたらどこかに行ってしまうそうですね。」

妻の状態は素人目にも明らかに悪かった。顔色は酷く、汗を流しながら、いつもは穏やかな表情もこの日は苦しそうに眉間にしわを寄せ、じりじりと左右に動いていた。

「どこにも行かないくださいね。」

じっとしてられるはずがなかった。彼はまだ彼女と話したいことが山のようにあった。彼女のためならどんなことにだってできる。そう、彼は心から思っていた。

「まあ、どこに行っても僕が見つけ出してあげますけど。」

妻はICUに連れていかれた。彼はその外で一睡もできずに彼女を見守った。

彼は妻の薄い腹をはじめた見た日、それは甘美な夢を見た。膨らんだ妻の腹に頬を寄せて、二人で笑いあっている夢。彼が目を見ました時、彼女もこんな夢を見ているのかと思った。それならば起こさない方が幸せだと思った。けれど、彼は想像してしまった。また妻と二人で笑いあう日々を。優しいだけの夢に浸っているよりも、辛くても苦しくても一緒にいたいと、思ってしまった。だから彼は目を見ました。そして悲観的になることをやめた。夢は夢でしかなく、いつか覚めるものだから。

彼にはずっと考えていたことがあった。彼女が目を覚ました時のことだ。きっと彼女は彼に向って何度も何度も懺悔するだろう。それをすべて許すことは決めていた。代わりに、彼は彼女に謝らないでおうと、これも決めていた。また一からはじめようと、決めていた。そこまではよかったのだ。問題は第一声である。意を決して現実に帰ってくる彼女に何と声をかければ、彼女は夢から覚めてよかったと思ってくれるのか。第一印象は非常に大切だ。格好つきたいと思うのは男の性である。海にでも誘うべきか、おいしい食べ物で釣るべきか。当然、彼女が帰ってこないときは考えない。それは彼女に対する裏切り行為だ。彼女はきつと帰ってくる。だから彼は安心して、彼女の帰ってきたときのことだけを考えていられるのだ。隣に座っている妻の両親ですら、彼が彼女の無事を神に祈っていると思っているだろう。彼がこんなにも樂觀的でいられたのは妻への信頼ゆえか、それとも彼こそがもう精神的な限界に達していたのか。それは誰にもわからなかった。集中治療室から出てきた彼女に彼がかけた言葉はあまりにも反射的で、これが正解なのだと彼は思った。だから、彼女が目を覚ました時も、同じことを言おうと決めていた。

「おかえり、ビオラ。」

夢は夢でしかない。けれど、夢を見ること自体は罪ではない。思われ続けた夢は時に成就し、現実となることもある。それが幸か不幸かを決めるのは他の誰でもないその人自身。望んだものが手に入らないのが現実ではなく、手に入ることがわかったものは夢と呼べないだけ。だから人は、はじめから諦めるのではなく、たとえ無理だと思ったことでも胸を張って望めばいい。叶うか叶わないかは少しの運と、強い人の意志によって決まるものだから。過ぎた幸福は些細な不幸を増大させるが、過ぎた不幸もまた些細な幸福を増大させる。幸せを夢見ているとき、人は不幸である。けれど不幸の中の幸福ほど得難いものはない。人はいつも不幸で、いつも幸福である。他人と比べることに意味はない。他人の不幸を喜ぶことほど、虚しいこともない。いつだって人は幸福で不幸だからだ。だから人は夢を見る。

人は夢を見る。息が絶える、その瞬間まで。



